
烈火の如く

水面出

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

烈火の如く

【Nコード】

N1104Z

【作者名】

水面出

【あらすじ】

この世には異能の力を持つ者たちがいる。ある少女との出会いで“烈火”の力を持つ少年の物語は大きく動き出す……！

第1話 始まりは連続殺人事件（前書き）

新しい小説始めました。文章力のない作者ですが、読んでくれたら嬉しいです。

第1話 始まりは連続殺人事件

次のニュースです

時刻は夜。

少年は自宅の居間でカップラーメンをすすりながらテレビを見ていた。

昨夜、蓮ノ江町で男性の遺体が発見されました

またか。

少年はそう心の中で呟いた。

呆れたように、はたまた面倒臭そうに。少年がそう思ったのには理由がある。

遺体は何か長い刃物で身体中を斬られたような外傷があり、そのため死因は失血死だと思われます。また以前にも似たような手口で数名が殺害された殺人事件があり、警察は同一人物の犯行として捜査を進めています

そう。この殺人事件は今回が初めてではない。

似たような……とテレビは言っていたが実際は全く同じ手口だという噂もたっている。

普段こういう事件を耳にしてもなんとも思わない少年だが、今回は少し恐ろしいという感情が生まれた。

それもその筈。殺害されたのは今回で九人目。しかも事件は全て自

分が住んでいる町で起こっているのだ。

こういう状況にあれば誰でも少なからず自分の身を心配し恐れることだろう。

この少年も例外ではない。

自分はまだ十六歳なのだ。やりたいことはいくらでも残っているし人生に絶望などもしていない。

情けなくも聞こえるが自分は死にたくない。当然のことだ。

まあそんなことを思ってもしょうがない。蓮ノ江町はそこそ広いし人口も多い。

その中で自分が襲われる可能性なんて宝くじで一等が当たるより低い。

第一、事件がまた起こるとも限らない。今回で終わりがもしれない。

元々楽観的な性格をしてるため、すぐに不安は取り払われ、

“心配ない”

そう自分に言い聞かせテレビの電源を消した。

そして自分の部屋に戻りベッドに寝転んだ。

（飯、食い足りないかも…）

そう思いつつも少年、“ほむじぎ 焰木 ようすけ 陽輔”は目を閉じ、睡魔に逆らわず眠りについていった。

明日、自分の身に大事件が降りかかるとも知らずに……

第1話

始まりは連続殺人事件

「ふ……ああ……」

陽輔は朝食をとっている途中まだ寝足りないのか、大口を開けて欠伸をした。

「陽兄、だらしない」

テールを挟んで陽輔の向かいに座っている鮮やかな真紅の髪が腰まである中学生くらいの少女が陽輔を戒めた。

“陽兄”と呼んだことから分かる。

陽輔の妹だ。

「ああ悪い、ひなた 日向許してくれ」

陽輔は自分の妹、日向に「冗談混じりで言った。

「別に怒ってないよ」

日向は特に表情を変えることもなく冷たく返した。

この兄はこのくらいのことは何度言っても反省しようとしな

その事が分かっているからこのような返し方をしたのだ。

「冷たいな」

「知らない」

陽輔は日向の反応にこれまた関心無さげに抗議する。

日向もそれを同じく関心無さげに返す。

一見仲が悪いように見えるがそんなことはない。お互い本当に気を許し合っているからこそこのような会話をする。

いつも通りのことなのだ。

ちなみに周りからも仲の良い兄妹と言われている。

「それにしても…」

日向は視線を変え、テレビのニュースを見て不安そうな顔色になった。

「また起きたんだ……殺人事件……」

日向は眉をひそめた。

テレビのニュースでやっていたのは昨日陽輔が見た謎の連続殺人事件についてだ。

「怖いのか？」

陽輔は不安そうな日向を見て心配半分、からかい半分で聞いた。

「だって……もう九人だよ？私たちが住んでいるこの町でもう九人の人が殺されちゃったんだよ？怖くもなるよ……」

そう言うとう日向はさらに不安そうな表情になった。

元来日向は気は強い方なのだが、こういったことになると途端に気弱になる。

「大丈夫だ」

陽輔は不器用な性格をしている。

「きつとすぐ犯人も捕まるって。心配ない」

だから自分が思っていることを素直に言葉にできない。
それでも自分の妹がこんな顔をしているのは嫌だ。

だから不器用なりに励まそうとしているのだ。

「ん……」

日向も陽輔が不器用なことを知っている。

それでも自分を励まそうとしてくれる気持ちも分かる。

そんな不器用な兄に日向は微笑んだ。

まだ二人が幼いころ、二人の両親は事故で亡くなった。

幼い二人には残酷な現実だった。

それでも陽輔は日向を元気づけるように言った。

『心配ない。兄ちゃんがついてる』

これが初めてこの言葉を言ってくれた時だ。

“ 心配ない ”

日向は兄が言ってくれるこの言葉が大好きだった。

この言葉を聞けばどんな不安も消してくれる気がしたのだ。

そして何より、ずっと自分のそばにいてくれた陽輔が大好きだった。

「何だ？俺の顔に何かついてるか？」

日向は陽輔のその言葉に自分が今陽輔の顔をじっと見つめてることに気がついた。

「ううん。何でもない」

いつの間に見つめてたんだろう…

日向は心の中でそう呟いた。

「やべ、もうこんな時間だ。早く食べようぜ」

陽輔は時計を見ながら言った。

「そうだね」

二人は食事を再開した。

「よ。陽輔。久しぶりだな」

高校の教室についていきなり話しかけられた。

「久しぶり…って、昨日も会っただろ」

陽輔は面倒臭そうに返す。

今陽輔の目の前に立っているのは“葉崎

翔一^{はなぎしゅういち}”。

陽輔とは小学校からの付き合いである。

「おお、そうだったな」

飄々とした性格だが意外と抜け目ない。

その事は翔一の家族を除けば陽輔が一番知っているだろう。

「聞いたか？また犠牲者が出たんだってな」

またその話か。

陽輔は少し鬱陶しくなってきた。こつも同じ話題を話されるとこんなにもイライラするものなのか。

「らしいな」

陽輔はいい加減に答えた。

「“らしいな”って……つまらない奴だな。もっとノリ良くしようや！」

悪かったな。

そう心の中でばやいた。

「まあ俺らにはあんまり関係ないんだけどな」

なら最初から話題にあげるな。

そう思う陽輔であった。

「もつと安くしてくれよ」

昼。

翔一は購買のおばちゃんとする意味重大な勝負をしていた。
陽輔はそれを傍観しながら突っ立っている。

「あの……」

不意に誰かに呼ばれたように感じ振り向いた。

そこにはとても長い美しい黒髪の少女がこちらを見て立っていた。

「これ……あなたのですよね……？」

少女が差し出した右手に持っていたのは黒いハンカチだった。

とても見覚えがあるため、少女の言う通り自分のだと分かった。

「さっき落としていたのを見たので……」

「ああ。確かに俺のだ。拾ってくれてありがとうな」

そう言っつて陽輔は手を伸ばしハンカチを受け取るうとした。

「……！？」

少女の手に触れた瞬間そこが光ったように見えた。

(……気のせいかな？でも確かに光ったように……)

陽輔は自分の目がおかしいのではないかと疑った。

「……あなたが……」

少女を見ると何かを見つけられたような顔をしていた。

「おい陽輔！飯買えたから行こうぜ」

そんな時、翔一が陽輔のことを呼んだ。

「ああ……。あ、ハンカチ、ありがとうな」

陽輔は少女がまだ何かを話したいと思っているような気がしたが、何故かその場を離れたい気持ちの方が強かった。

「それにしても……お前やるな」

屋上で焼きそばパンを頬張っている翔一が陽輔に言った。

「何がだ？」

「お前がさっき話してた女子。ありや二組の清水 小春じゃないか」

（清水 小春……知らないな）

陽輔はさっきの少女のことを聞いても全くピンと来なかった。

ちなみに陽輔と翔一は三組である。

「お前：まさか知らないのか！？清水はこの学校一の美少女だぞ！？聞いたことくらいあるだろ！？」

そつえば、確かに美人だった。

「いや知らん」

それでも知っているかどうかは別である。

「お前……」

翔一は呆れた顔になっていた。

「まあ清水が美人なのは分かった。それよりもさっきの言葉の意味は何だ？」

陽輔はさっきの翔一の“お前やるな”の意味が分かってなかった。

「ああ、それはな」

翔一は焼きそばパンの袋を丸めてポケットに入れながら言った。

「あいつ男子とは……というか誰とも全然話さないんだぜ」

陽輔は翔一の言ったことがよく分からなかった。

「それって……どういうことだ？」

「どうもこうも、簡単に言っちゃえば友達いないんじゃないかねえの？」

あの子が？

陽輔は頭に疑問符が浮かんだ。

「もったいないよね。あんなにかわいいのに」

陽輔は未だ理解しきっていなかった。

学校一の美少女なのに、友達がない？

不器用な自分でも十数人はいるというのに。
さつき見た時もそんな感じはしなかったのに。

陽輔は人は見掛けによらぬものと改めて思った。

「そんな清水がお前と話してるから、実に興味深い訳だ」

翔一はニヤつと笑い陽輔を見た。

「なに話してたんだ？」

ここで嘘をついても何の意味もないので陽輔は正直に話すことにした。

「ハンカチ拾ってもらってただけだ」

「それだけ？」

陽輔がこう言うと翔一はなぐんだと言ってつまらなさそうな顔をした。

「てつきり告白かなんかだと思ったぜ」

それはない、と陽輔は思った。

それでも陽輔にはまだ一つ気になることがあった。
清水と手を触れた時の光だ。
自分の見間違いかもしれない。

それでも気になっていた。

「ま、そんなつまらない理由なら俺は興味ないや」

それは結構失礼じゃないか。

そう思ったが口には出さないことにした。

午後の授業も終わり、陽輔は帰り道を歩いていた。

「もう暗いな。早く帰らないと日向が心配する」

現在中学三年の日向は部活には入っていない。その為帰宅時刻はいつも日向の方が早い。

前連絡せずに九時まで家に帰らなかったら泣かれた。

だからなるべく早く帰るように、もし遅くなるんなら必ず連絡しているようにしている。

(……………)

陽輔は考えていた。

(あの光…………)

陽輔はまだこのことが頭から離れない。

いつもなら同じことには執着しないのに今回はずっとそればかり考えていた。

何故こんなにも考えているのか自分でも分からないでいた。

その時、ものすごい轟音が鳴り響き、それと共に目の前のコンクリートの地面が抉られ、地面に衝撃が走った。

陽輔はそれでバランスを崩し尻餅をついた。

「なんだ…………！？」

コンクリートが抉られた場所にいたのは三メートル近い身長をもつ大男。

肌はどす黒く濁った色をしており体の所々に歪な縫い傷がある。

そして一番目を引かれるのは大男が手にしている大男の身長と同じくらい大きい刀だった。

大男はこちらを向くと気持ち悪い笑いを浮かべた。

顔を見ると人間とは思えないような気がした。

「へへ…才前デ十人目ダ…！」

その言葉から陽輔は即座に理解した。

あの連続殺人事件の犯人はこの大男だ。

そう思うと同時に陽輔は諦めの念が生まれた。
捕まらないはずだ。こんな奴が犯人じゃ警察も役に立ちはないだろう。

そして今この大男は自分を殺そうとしている。

陽輔は何故かとても冷静になっていた。

“死”がすぐそこまで迫ってきているというのに。

（俺は……死ぬのか……）

「フへへ…俺ノ遊ビノタメニ死ニナア…！」

大男の刀が降り下ろされる。

陽輔は思わず目を閉じた。

(……………?)

金属同士がぶつかるような音がした。

来るはずであろう衝撃も一向に来ない。

陽輔は何が起きたのか確かめようと目を開けた。

長い黒髪の少女が刀を持ち大男の一撃を止めていた。

「大丈夫……？」

そう。清水 小春がそこにいた。

第1話 始まりは連続殺人事件（後書き）

どうも、作者の水面出です。

陽輔

「この話の主人公の焰木陽輔だ」

始まりましたね。新小説。

陽輔

「前書いていた小説を終わらせないままな」

ぐ……… 大丈夫。心配ない！

陽輔

「俺のセリフ勝手に使うなよ」

私は作者だ。従ってどのキャラクターのセリフも言う権利がある。

陽輔

「作者権限か」

そうですが、何か？

陽輔

「いや。それより終わらせ方微妙じゃないか？」

知りません。

陽輔

「それに文章力も無いし」

聞こえません。

陽輔

「まあ作者が作者だから仕方ないか」

後書きは作者を罵倒するための場じゃないですよ!?

陽輔

「ま、そんなことは置いとくか」

置いとくの!?

陽輔

「ペースを乱されてるぞ水面。落ち着け」

君のせいですよ!?

陽輔

「とにかく、後書きではこんな風に作者とキャラクターがしょうもない話を繰り広げるから。別に楽しみにしなくてもいいが楽しみにしといてくれ」

言ってること矛盾したませんか!?

陽輔

「それじゃ今回はここまでだ」

勝手に終わらせるなよ！

陽輔

「次回 “目覚めし烈火” お楽しみに」

うおい！！

第2話 目覚めし烈火（前書き）

展開が妙に早いです。相変わらず文章力ありませんが読んでくださ
い。

第2話 目覚めし烈火

第2話

目覚めし烈火

「清水……？」

陽輔は自分の目がおかしいのだと思った。
さっきまで自分が考えていたことの中心人物、清水　小春がここに
いる。

しかもそのかわいらしい見た目に似合わず右手に身長と同じくらい
の長さの刀を持ち、大男のとてつもなく重そうな剣撃を止めている
のだ。

陽輔はパニックになりかけたが

「大丈夫ですよ焰木君。あなたは私を守りますから……！」

小春のこの一言でまた冷静さを取り戻した。

（守る……って言われても……未だこの状況が理解できてないんだ
が）

陽輔はそう思ったが深く考えるのをやめた。
今はただ大男をどうにかする方法を考えていた。

「何ダ才前？」

大男は自分の攻撃が邪魔されたのが気に入らなかったのか、小春を睨んだ。

「あなたみたいな化け物が知る必要はありません」

小春はそう言って刀を両手で持って構えた。

「ハ……マアドウデモイ……。邪魔スルナラ才前モ殺スマデダ！」

大男は刀を大きく振りかぶった。

「お、おい…清水…！逃げねえと…！」

陽輔はその姿に危険を察知し小春に逃げ出そうと促すが

「平気です」

小春はそう言っただけで振り向きもなかった。

陽輔は焦りかけたが小春の背中から不思議な安心感を感じ、小春の言っていることを信じその場にとどまった。

「死ネエー！」

大男の刀がものすごい速さで降り下ろされた。

だが一瞬で刀の勢いは止まった。

「ナ……！？」

小春が先程と同じように自分が持っている刀でその一撃を難なく止めていたのだ。

小春の色白な腕は細く竹刀すら振り回せなさそうなくらい弱々しく見えた。

だがその腕で己の身の丈と同じくらいの刀を軽々と持ち、大男の重さもあり勢いもある刀の一撃を片手で防いでいる。

人は見掛けによらぬものだ。

陽輔がこう思っただのは今日二回目だった。

「どうしました？そんなんじゃない私は殺せませんよ？」

小春は大男を見上げながら冷ややかに言った。

「ク……！コノガキヤア……！」

大男は今の言葉にキレたらしくもう一度刀を振った。

小春は今度は止めるのではなく大男の刀を受けそのまま自分の刀の向きを変えて太刀筋を逸らした。

大男の刀は地面に降り下ろされた。

「グッ……！」

大男はバランスを崩し片膝をついた。

その瞬間小春は地を蹴り飛び上がった。

そのまま空中で一回転して踵落としの体勢になり、勢いをつけて脚を降り下ろした。

「ガッ……！」

小春の踵が大男の顔面に決まり鈍い音が響いた。

「ゴノ……！」

大男は小春が着地したところを狙い刀を振ったが、小春はそれを紙一重のところであわし自分の体重をかけるように踏み込み大男の懐に入った。

そして一瞬で大男の脇腹を刀で斬りつける。

「グア……！」

大男は傷みに苦悶の表情を浮かべた。

大男の脇腹から血が流れ落ちている。

（すげえ……）

陽輔は小春の戦いに不謹慎ながらも見とれていた。

大男を素早い動きで翻弄し、隙を見つけては攻撃する。

その流れるような動きはまるで一つの舞のようにも見えた。

「コンノオオオオオオオオオオ！！！」

大男はがむしゃらに刀を振るい始めた。

もちろんそんな攻撃が小春に当たる筈がない。

その間も小春は攻撃の隙間を掻い潜って大男に何個も斬り傷を与えていた。

「そろそろ終わりにしますよ」

そう言う和小春は刀を両手で持ち直し、それを後ろに引いた。

陽輔は次で決めるのだと確信した。

その考えは間違っておらず、小春は大男との間合いを一気に詰め躊躇なく大男の頸動脈目掛けて刀を振り抜いた。

それと同時に大男の首から大量の血が飛び散り大男はその場に倒れた。

「ふう……」

小春は刀についた血を落とすように刀を軽く振った。

「……大丈夫でしたか……？」

途端に小春は戦っている時の凜々しい顔から今日陽輔が昼間見た気弱そうな表情になった。

「……………」

陽輔は言葉が口から出なかった。何を話して良いのか。聞きたいことは山のようにあるのに聞けなかった。

「やっぱり……………恐ろしいと……………思いますよね……………」

小春は俯き泣きそうな顔になった。

自分がこんなにも躊躇なく命を奪える人間だと知って恐怖しない人などいないと思っているのだろう。

“ 自分は恐ろしい ”

小春の頭にはその言葉がいつも渦巻いていた。

「格好良かった」

そんな小春の顔を見て陽輔はこの言葉が口から出た。

何故かは自分でも分からない。

ただたった今思い浮かんだ言葉を言ったのだ。

それを言われた本人は目を丸くした。まさかこんなことを言われる

なんて思ってもいなかったのだろう。

「格好…良かった…ですか…？」

小春はおどおどしながら陽輔の言葉を繰り返すように訊く。

「ああ」

陽輔は一切迷わずに即答した。

「それは置いといて……」

陽輔は立ち上がり倒れている大男の方へ歩み寄った。

「こいつ……一体何なんだ？」

陽輔はとりあえず気になっていることの一つを訊く。

本当はもっと一気に訊きたいのだがそれでは答える側の小春が大変だろうと思い一つにしたのだ。

「……………（格好……………良い……………？私が……………？何でそんなこと……………）」

当の小春は何かを考えているらしく陽輔の言葉を訊いてない。

「おい、清水？」

陽輔は小春が自分の質問を全く訊いておらず黙ったままなので不意に小春の名前を呼んだ。

「はひゃい！？」

いきなり呼ばれたように聞こえたのか、小春は素っ頓狂な声を出す。

「な、何ですか!？」

「いや……訊きたいことがあるから……」

陽輔は何故か何か悪いことをした気分になった。

「あ………はい………えつと………っ!！」

陽輔の質問に答えようとした時、小春は陽輔の後ろに倒れている大男が動いたのを見た。

「死ネエ!！」

そして大男が持っている刀が陽輔に降り下ろされようとしていた。

「っ!！」

陽輔も気配に気付き後ろを向いたが、すでに大男の刀が眼前に迫っていた。

「危ないっ!！」

直後陽輔は身体が突き飛ばされ、

「あうっ……!！」

悲鳴と共に小春の右腕から鮮血が飛び散ったのを見た。

「清水！」

「モウ、許ザネエ！ブチ殺シデヤル！！」

大男は首から大量の血が出ているにも関わらず狂ったような大声をあげた。

「うっ……」

小春の右腕には大きな傷がついており、おびただしい量の血が流れ出ている。

（どうしよう……これじゃあまともに戦えない……！）

小春は右腕を抑え苦悶の表情を浮かべながら考えていた。

（けど……焰木君だけは助けなきゃ……！）

小春は左手に刀を持ち構え直した。

「清水！無茶だ！やめろ！」

戦闘に関して素人である陽輔にもあの状態ではまともに戦えないことぐらいは分かった。

「平気です……！焰木君は逃げて下さい……！」

「逃げてって……一番出来ないことを言うんじゃないかよ……！！！」

「っ…！」

陽輔は危険な状況で怪我をした女の子を放つといて自分だけ逃げるなんてことができる程薄情な男ではない。

ましてや自分を守ろうとしてくれた女の子だ。

放つとはいはいけない。

「駄目です！あなたはまだ能力が目覚めていません！」

（能力…？）

陽輔は小春が言った言葉が気になった。

（能力って…あれか？マンガとかでよくある超能力みたいな奴か…？まだ目覚めてないって…まるで俺の中に眠ってるみたいな言い方…）

陽輔はそんな風に思考を張り巡らせていたが中断された。

「あ…ぐ…」

小春が大男に首を締め上げられていたのだ。

「清水！」

「焰木…君…に…げ…て…」

「ヒヤハハハハハ！マズハオ前カラダ！！」

大男は左手で小春の首を締め上ながら右手に持っている刀を振りかぶった。

その瞬間、陽輔は自分の体の中で何かが燃え上がるような感覚がした。

（死なせねえ……！！絶対死なせねえ……！！俺を守ろうとしてくれた奴だ……！もし……清水の言うとおり……俺の中に何かの力が眠ってるんなら……）

陽輔は大男に向かって走り出した。

（今……）

「アア！？タダノ人間ガ俺ニ何カスルツモリカ！？」

大男は標的をかえ陽輔に刀を向けた。

「ほむ……ら……ぎ……く……」

（俺に力を……！！）

陽輔は右拳を握り

「ハ……！？」

その瞬間陽輔の体が炎に包まれた。

（……………！焰木君の……………能力が……………目覚めた……………！！）

小春は薄れ行く意識の中、陽輔を見てそう思った。

「はああああ……………！！」

陽輔を包む炎が右拳に集中し、炎の渦を巻いた。

「ナ……………何ダ！？タダノ人間ジャア……………！！」

大男はその姿を見て驚き、恐れた。

「うおおおおおおおおお！！！！」

陽輔は腕に力を入れ

「ヤメツ……………！！」

「らああああ！！！！」

烈火の拳を大男の鳩尾に打ち込んだ。

「ガアアアアア！！！！」

大男は耐え難い苦痛を受け小春の首を掴んでいた左手を離した。

「あつ……………けほつ……………ごほつ……………！！」

小春は首の拘束から解放された。

「清水！！大丈夫か！？」

「けほっ……大丈夫です……。それより、まだ……」

「分かつてる……！」

大男はまだ倒れてはいない。陽輔はそれをちゃんと分かっていた。

「ゴノヤロウ……！！！！ゴロ……ジデ、ヤル……！！！！」

大男はもうまともに意識は残っていなかった。

「はあああ……！！！」

陽輔は再び右拳に炎を溜め始めた。

炎はみるみる大きくなっていく。

「ウガアアアアアア！！！！！」

大男は刀も持たず両腕を振り回した。

「ふっ……！！」

陽輔はそれを避け、大男残っていなかった懐に入り右手を引いた。

「“烈火拳”！！！」

そのまま拳を突きだした。

「ゴガッ……………」

大男はその瞬間に炎に包まれて

「ア……………ガ……………」

その場に倒れ今度こそ完全に息絶えた。

「はあ……………はあ……………」

陽輔を包む炎がおさまっていく。

「……………！」

陽輔は思い出したように後ろを振り向く。

「清水……………！」

小春は気を失っていた。

（……………とりあえず……………うちに連れていこう……………！）

陽輔は小春を抱き抱え自分の家へと走って行った。

第2話 目覚めし烈火（後書き）

第2話終了です。

陽輔

「初のバトルシーンだったな」

ええ。バトルシーンになると余計に自分の文章力の無さに悲しくなります。

陽輔

「なら書かなきゃいいだろ」

それでも書きたいんです。

陽輔

「理解し難いな」

別に理解してもらおうと思ってません。

陽輔

「そうか」

話は変わりますが、最近テストがあっただんですよ。

陽輔

「どうだったんだ？」

聞かないでください。

陽輔

「お前から話し始めたんだろうが」

はい。でも聞かないでください。それだけは。

陽輔

「まあそれはいいが……。じゃあ何故テストの話題を出したんだ？」

特に理由はありません。

陽輔

「ないのかよ」

敢えて言うなら字数稼ぎのためですね。

陽輔

「最悪だな。くそ作者め。死ねばいい」

ひどっ！

君たちを作り出したのは私なんですけど！？

陽輔

「別に頼んでない」

そんなこと言っと消しますよ……！？

陽輔

「やってみろ。そのかわりこの小説は主人公がいなくなるけどな」

ぐ……！

まあ今回は許してあげましょう……。

陽輔

「臆病者め」

何か言いましたか？

陽輔

「いやなにも」

……

陽輔

「それじゃあ今回はここまでだな」

不本意ですが……そうしましょう。

陽輔

「次回 異能の力」

お楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1104z/>

烈火の如く

2011年12月6日23時47分発行